



替えが手動でも何とか処理されいたが、NHK、民放の地方テレビ局が急増すると、その回線切り替えの作業が追いつかず、事故が多発して番組が突然中断するなど、民放局では、そのまま営業を直撃する大問題になつた。電電公社では当然機械化による自動切り替えを検討、推進中だつたが、新設が続く地方テレビ局の要請に直ちに対応することは到底不可能だつた。

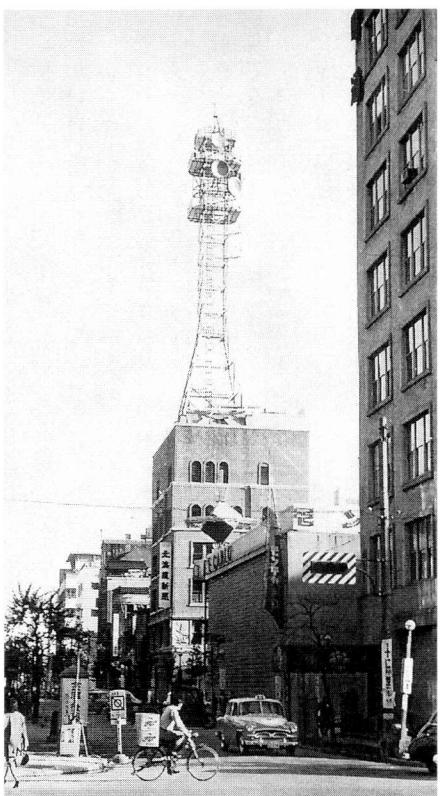
STV開局前のHBCは東京の民放キー2局の番組を選択して受けていたが、マイクロ事故による営業の悲鳴が後を絶たない。この事態にどう対処すべきか、当時の阿部社長と杉山技師長の協議の結果であろうが、キー2局の番組受けのマイクロ切り替えを電電の手動に頼らず自社でおこなうと決断した。

#### 銀座に鉄塔を建てよう

当時、HBC東京支社は銀座七丁目並木通りの北海道新聞東京支社の最上階にあつたが、その屋上に自前の鉄塔を立てて中継基地を建設しようというのである。マイクロ回線は、日本テレビとラジオ東京の自営マイクロの2回線と六本木のTRCへ送出する電電マイクロ設備による3回線で、パラボラアンテナを電波障害の無い高さと空間を確保するために

周辺はネオンが輝く日本の社交街の中核地である。その真ん中に無粹な鉄塔を建てるとは何かデザイン上の工夫がなければ笑い物になりかねない。そこでアイディアを出したのが杉山技師長だった。周囲の風景にマッチするように、夜には輝く星で飾つたらどうか。こうして銀座に夜の帳が降りるころ、北極星が鉄塔の頂上で金色に輝くマイクロタワーが出現したのだつた。

STV開局前のHBCは東京の民放キー2局の番組を選択して受けていたが、マイクロ事故による営業の悲鳴が後を絶たない。この事態にどう対処すべきか、当時の阿部社長と杉山技師長の協議の結果であろうが、キー2局の番組受けのマイクロ切り替えを電電の手動に頼らず自社でおこなうと決断した。



北極星が輝いたマイクロタワー

銀座に鉄塔を建てよう  
当時、HBC東京支社は銀座七丁目並木通りの北海道新聞東京支社の最上階にあつたが、その屋上に自前の鉄塔を立てて中継基地を建設しようというのである。マイクロ回線は、日本テレビとラジオ東京の自営マイクロの2回線と六本木のTRCへ送出する電電マイクロ設備による3回線で、パラボラアンテナを電波障害の無い高さと空間を確保するために

支社には既にラジオのスタジオがあつて、ラジオドラマ、ニュースの中継などに活用していた。  
昭和33年、そのスタジオにカメラを持ち込みテレビ番組制作を始めた。

なつて事故は激減した。番組編成も楽になった。営業は勿論、経営陣も技術も問題の解決にほつとしたのは当然である。

余談だが、杉山さんは、敗戦までのJODKの技術者だった。JODKといつてもピンとこない人が多いと思うが、AK、BK、CKに続いたDKは、戦前の京城放送局である。

戦後帰国され、民放発足に当たつては国会でNHKを相手に堂々の論陣を開いた民放の恩人でもある。



大活躍したミニスタジオ

ミニスタジオの誕生である。毎週金曜の午後、東京のスタジオと札幌を結んで30分番組『東京スタジオ』を放送、北海道に關係のある有名タレントに主演してもらい、まさに二元放送のハシリだった。この二元放送は東京キー局や業界でも話題になり『週刊新潮』でも民放地方局のユニークな小さなテレビスタジオとして紹介された。漫画家おおば比呂司氏や井崎一夫氏の対談など漫画ともども評判だった。

だが、このミニスタジオの機器はどうだ。

政治家、財界人では、篠田弘作、渡辺惣蔵、小平忠、萩原吉太郎など北海道に關係深い各界の人びとが時の話題にあわせて出演している。一度だけの試みだったが、ライトバンに機器を積んで手作りのテレビ中継車を使い東京浅草での歳末風景『ぼろ市』を、銀座の北極星タワーからマイクロで札幌へ中継したのも懐かしい思い出である。

#### VTRデモに「オー！」

その頃、待望のVTRをアメリカAMPExが製作。当時のOTVが輸入してこの東京スタジオで民放関係者などに披露された。イメージオルシコンで撮影された映像が、直ちにVTRで録画再生成されると、一同『オー！』と歓声をあげた。幅2インチの広いビデオテープが走り、再生のヘッドは高速回転で、

まだ真空管で、保守の苦労には参つたが、技術一同は懸命だった。

資料で拾った番組をあげてみると

『北海道の夏を生ける』＝勅使河原和風。『作家と北海道』＝原田康子、八木義徳、戸川行夫。『エルムの園

をしのんで』＝松山茂助、宮部一郎。『当たり屋道産子大いに語る』＝川内康範、清水明、近藤日出造。『これから北海道』＝村上勇、町村金

五、南条徳男ほか。

内康範、清水明、近藤日出造。『これから北海道』＝村上勇、町村金

五、南条徳男ほか。

政治家、財界人では、篠田弘作、渡辺惣蔵、小平忠、萩原吉太郎など北海道に關係深い各界の人びとが時の話題にあわせて出演している。

一度だけの試みだったが、ライトバンに機器を積んで手作りのテレビ中継車を使い東京浅草での歳末風景『ぼろ市』を、銀座の北極星タワーからマイクロで札幌へ中継したのも懐かしい思い出である。

だがまもなく、これも国産化されVTR一号機を東京支社に設置してテスト運用することになった。サブに座る人間が寒くなるほどの冷房を準備したが、この国産VTRは運転中に部品が赤熱、ビル中の扇風機を動員して局所を冷却、どうやら番組を終わらせたこともある。担当者は冷や汗ものであつたが、今では懐かしい笑い話である。

このVTRはラジオ東京の要請で芸術座とHBC東京スタジオをマイクロで結び、菊田一夫作『がめつい奴』を4時間録画したことがある。地方各社は鉄塔見学

テレビの放送時間が拡大されるにつれ、当然のことながら回線業務も輻輳してきた。マイクロ回線端末機器を遠隔制御することで業務を簡素化できないか、技術陣に課題が与え

サーボで精密制御され、真空管で組まれた大型ラックの機器で、画質も良くさすがと驚いた。

当時のテレビはスタジオ生番組か映画フィルムなどで、当時ニュース

もフィルムで取材、録画といえば、

キネスコープ録画、いわゆる『キネ

レコ』録画で、瞬時の再生は不可能であり、画質も電子録画のVTRとは比較にならないものだった。

られた。研究の結果、当時としては始めて、電話線で電源を投入、切斷する遠隔制御システムを試作し運用合理化に成功した。

民放ラジオ局がこぞつてテレビを開局する時期だった。民放連主催の勉強会が開かれ先発局の一員として講師を努めたこともある。その一方キー局とは異なる地方局HBC東京支社のテレビ設備がいささか珍しく参考になることもあつたのか、開設準備中の地方民放局の幹部が北から南から見学にこられた。応接も大変だつたが、熱心な質問はテレビ初期の熱気そのままであつた。

その後、マイクロ回線は札幌までの間に東北放送が、更に札幌テレビが開局、HBC専用の回線は使用できなくなつた。あわせて、テレビのネット系列化が始まつた。

更に民放のマイクロ回線費用負担も膨らみ、ペール方式での回線負担が検討されることになつたが、各社の利害が絡む大変な問題で、民放連のマイクロ回線協議会で何回となく討議、推進された。

電電公社の体制もその後逐次整備された。回線数も増え、自動スイッチングセンターの機器も完成、機能を開始した。

それでも、年度は判然としないが

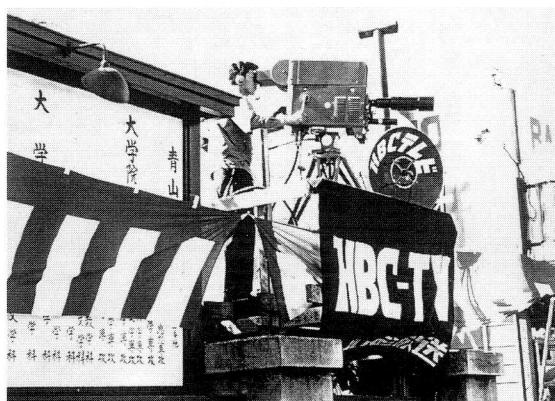
忘れられない年始の記憶がある。

HBCの北海道神宮の新年参拝風景

はタイミングよく雪も降り始めた。だが、東京キー局まで上つた途端、TRCのスイッチングミスで映像が切斷された。本社技術からの怒りの電話が鳴く響く。新年早々の元旦、電電の責任者にドナリ込みをさせられた強烈な印象の正月でした。

### 北極星よさようなら

テレビ放送の歴史に多くの想い出を残し、名残り惜しくもあつた銀座マイクロタワーの使命も終わつた。



昭和35年4月、タワーは解体された。何せ銀座のど真ん中。解体工事は慎重を期したが、北海道新聞ビルの西隣には芸者の置屋があり、鉄塔の解体中に苦情処理の挨拶に出かけた若いスタッフが艶やかな新橋芸者をかいま見て胸を躍らせたのも、解体に伴う楽しい話題であった。

ミニテレビ局で活躍したカメラの最後の晴舞台は、あの昭和34年4月の『皇太子御成婚大パレード』の中継であつた。HBCが担当した青山学院前の中継地点、馬車の上の美しい美智子妃を、一瞬のカット映像でとらえて全国の視聴者に送り出したことでカメラ冥利に尽きたと言えるだろう。

北極星鉄塔の解体は支社の技術者にとっては大きな歴史の転回点であつた。スタッフ一同は銀座での勤務を惜しみつつ、打ち上げは伊豆海岸でキャンプ。その後、おまけとして今はなき日劇ミュージックホールの観劇で終わつた。

時は過ぎて、銀座七丁目並木通りの北海道新聞東京支社は、今は改築されルイ・ビトンのブランドビルとなり昔の面影はどこにもない。

今度上京したら、裏小路に今でも残る小さい飲み屋を訪ねて、北極星が輝いた頃の昔話でもしたい。